

御用に徹する年 長島すす子

明治維新
「明治」の年を語るとき、思ふかな
新年に比べて
昔の「明治」
と御説きなさいました。新年の
御説。そのまゝの新しい年を説
きまして、東京の明治神宮と新
年の御舞臺出席で御舞臺上し
られます。大きな幕の裏、四
角四十七は信徒の私が四つ
に組んで膝輪を、で常に望む
この年を語りまします。
かつて明主御親王在位の折り
二千五年の間に殖えた御神
の歳が二千六、二千七年、結製の
元慶を歩まはされた事に因で

泡鳴なる新しい生活を求め
て、安心の城に臨みか
てたり。その神域の中に
も「ワヤ」と思ふの気々に
合つた時は、大國の神の力の
「奇蹟」をたまわります。有難
いおきまをいさいます。
明主様は御賓客に向て
「この明世界の幸福は大体
出来た。に好むのたまをいい
方に使つた」と御本、讀です
ね。そこにまた讀していい
方、使つたといふ。人に
作らせねばならぬ、と共
に「これおぼせなせな」ならぬ
に。このように「僕等の御親

想念次第 御教え配布の尊さ 石井 宏(甲)

今年の秋、秋田東奥産の学生、青年は教団の学生運動に参加しました。学生のみなさん、お氣を十分の間に自分もしかりやられたいと強く感じまして、四日間の神成会中は、生懸命に勉強したつもりです。

しかし、教会から帰るまで、非常に疲れてしまいました。じつは配布やうすばかり通つていまして、支部の親しい人から働きにまけず、教会は正しいのを出して、夏休みの残り少ない期間をかりしていろいろな心して配布を始めました。やってみて思ふなしては、はなすまでもないです。その

際、たまたま現れてゐる、この氣持になつてしまひました。勿論その思は思ふ調子が悪いなり、しやうろく起しても口先の言葉がきかぬなくなつてしまふです。

それでも身体はほだいて五回歸つてゐたに過ぎません、一部を出す、愛おしく上げの状態に、と、直接にお話しなもので、私はくらがなうてみたところで、同じで、ただ、こつていゝをうけ上手な人、下手な人があるんだ、と、自分が都合のいいところを、今思ふは、なんでもない男、女の思ひました。

九月になつて、もういよいよ氣持がよいので、とうとう淨土を
いったんだ。三、四
五、六、七日と暮んでしまいま
した。ようやう十日の先生體面
目配布のお許をいただいたま
なしかつて左様と同じが
で、その日もまた、都も配らして
いたけれど、この時はほんとに
失禮です！ まいりました。もう配布
なるものか思いました。したが
あつた厚生会だか行こうといふ
気が起こりまして、参加させて
いただきました。

その時の先生の話しに「配布
は運動なんです。お祈りがなけ
れば自分の身軀がた低いから止
す。また願かけを付くつもりま
す。初めてお祈りをしなくて、配布さ
せていたことがありました」
それは息を吐いて待つ、持つた大
團圓の一語だけで、十五日は一
度、十一日は三千分で、五日、こ
の時とを少し書いてみます。

この日十國百人の縁かや
らせていただくとして、先輩の
友人と聞かぬうちに、先輩の
が、あち行く気がなくなつて、
とうとう約束破つてしまいました。
たのでその日はグループ先決だ
った支部へ行きまして、先輩は
一人で居てきたと言ひまし
た。「僕は神様と約束して実行し
ないで、心の中では思つてゐる
うとでもなりな」と言われまし
て、しかし配布出かけたのは、前
す。ところが又三千分まで、二回
も出ました。しかし通順の縁か
で、假してしまひ、いたいた
お祈りが落ちてしまひました。それ
時は落ちたのに気がつかず、最
の家でお金をはたき、した時に
がついて、はつと一
の力を凝かめたらならないのだ
づくりして、頭で来た道義、い
しょうけんめい理屈を、夫
な神様の心配の後受、また
本當に心配とどんだん願
なる町の中を駆け廻しました。

10年の肝臓病ケロリ

[illegible]

御教无

「すなわちやうですね。政だと、三十一文字で
宛に西国字も二百も言う事を述べさせるんで、
いかんか、敬、俳句をやるのは非難に負いと
は季節的な俳句を贈るに――俳句して、例
えいするね、敬、俳句を作ろうと誘うように」
七五に落着いて、と言う事は、無所です。さ
かへ、無所を見附ける事になる。こゝ言
頭のとつてあるんです。良し事を思ひま
ね、趣味のいい者はしょうがないが、少して
意味のある者は、大いにやると思ふ。

(表4・80)

◇1月週句◇

折井 因
川中 新
高本 雲
川中 さ

天南天北
久しふれ
アボテン
また紀美
登り集の
朝の面影
閑もみだ
高山寺の
しも結の
はれまの
雨の夕ひ
青きの上
育くぬ
おこす
雲の夕
その朝
月夜の
輝だは
ストー
の辺
を幾や
はる

同本 弘
 中津英津雄
 森本 政司
 小林加代子
 坂本 卓也
 上田小夜子
 上田 修一
 大崎 益子
 大崎 光昭
 岡野 澄代
 大塚 健治
 丸田 昌子
 吉田 信子

十八日の日は三郡十九日はれ
 いづれも四郡（今でもこれ以上
 ありません）を配布せよとい
 ました。二十一日二十日は
 三郡三郡でした。二十三日は
 四郡も三郡はあててた
 ました。二十五、二十六日は行
 きたのでやっていません。
 人口は再訪問の要行して
 がとわられてしまつたので
 ころが乱れましたが、明主
 の心配を思い浮かべて、この
 いの事でくづけてはけない

[illegible]

「選ばれた者」の感動生かそう

照生君は、その折に、申し上
 げ、天保十四十七年の春を以
 て、五に一つがなぐ如きとが
 てまゐしなごを、感佩いたし
 ます。
 さて本年元日の朝日新聞・天
 人新聞に次のやうなことが記
 されてゐた。
 「既に申し、この地球が、少
 少「西傾」に立つたやうだと、太
 陽點が、漸次移動して、一生
 命に足らないやうな、と氣象學
 者に聞いてゐるが、如何、今
 さら「西傾」の如ければ、地球
 するたゞの、またも、地球が月
 球の如く、大氣を失ひ、引力が
 たゞだといふ（中略）あり
 かつ、地球の自転軸は、少し傾
 いてゐる。そして、その傾きの
 方が、年々、増大するといふ
 から、地球は、何かに引かれて
 傾いてゐる。四角の旋化の、地球
 は、どうなつてゐる。
 といふやうな、と私は、
 女が、
 海濱に、
 其の、
 は、
 星の、

明王はこれの傳説とて、たゞ閑つてに好趣味に耽つておられまして、御教文「無神論」づいての申す、次のように御筆を起遊めたいと思ひます。

『言までもなく天と地との間には、日月星辰、雲霞の飛騰、雷風等々、有形無形の天の現象から、直降人間に關する動物、植物、鉱物等々、凡ゆるものは大抵の間に、よつて生産化育されてゐる、これがあつたまの世の爲めであつて、これら一切を白然たるに、無礙徒勞に、靜に觀察するに、無礙徒勞でない、切切々不忠實の態度行たれ。』

言へべき知識を知らないのである。寧ろ何から何まで知識の淵を知らねばならぬ。とたゞこれにすればいいこの世界のものは一體だが、何が爲、何の爲因によつて造られたものであつたかといふこと、何人かものをあきらめざるを得なであらう。』

そして、たがへ、何であらうの意圖によつて造られたものであつたか、きまされては、別が御教文「宗教世（メソヂ）と教義」の冒頭で、『御々、世界の創造なる神の特、エホバ、は、大動土、地球を樹立すべく、大動土

人類の新しい呼を授け④開生院院長の土曜日の研鑽を見る信徒新年賀で会長先生の研鑽

に附記させていただきます。いかなるものではないかと存じます。

つまり宇宙、世界の創造は、主の大御によりてなされたもので、しかも、その二方面は人間の妨に過ぎないから、從つて先に引用したように、先ず人間に配属されてある、太陽と連つたの南緯、地球の大きさ、地の自転軸の傾きなど、すべてが大御が人間のために、人類が進歩できるように創造されたものであるのです。そして「神の代行者」として選ばれた、人間は本来、主神の御意に従ふものの、「神の代行者」の使命を与えられてゐること

的は、天國をのり地上に轉ずることを企てた。その天國思想の時が最早到来してゐると、その天國は、明王様として降臨されることになりました。

然し右に記いゝの重大問題「天國降臨の直前に」最後の審判が行われることの世界的大浄化作用に關する者は、想像を絶する勇氣が必要と云へ、更重大なことは、明王様が救世主としてあられることです。

聖なる宇宙の歴史、人類の歴史、今日までの長い歴史、天地人神立派のこの「聖書

いたいておられることは、確實さでありながら、天國の降臨されてゐたことが、實際の根本線面であり、ひいては成の幸福の唯一の道であると存じます。

次のような結論があります。

「全く大方が懸いてゐる、正統な別がつかないメシヤ教なんか、中絶！小さいうちから、大断で、世界人類救済と云つて、これ大きい事はないんですからね、目標も定めていませんからね、だから隨分よく進まなくなつてゐる」と云ふが大體

者」の感動生かそう

辰巳 健二

り行はるゝのである。二つに對して人間を救ふ代行者として之に、「万有は人間の爲に造られたものである。」「前に」を脱ぎ去つてられます。そして世間の調子が、
「『最早人類愛の詩が來た』と宣傳されてゐる。從つて之に又調

るが、その行徳による人類救済の大使命を著し出づにこのためである以上、私によつて真理の探究を説き、人類救済の教を實行すると共に、新文明を建設しに努めるの兩重の役割をも併せ負つてゐるから、寧ろ至人類に好する空想前後の一大福音である。」

以上の御教は、概ね次のよう

するが如何に無益であるに類
 するが如何に無益であるに類
 常止まるを自んせし。御覽に
 一いゝ高き聲でもはななりと
 思ふ人ゝ人なる人なれ」
 と取りますので、またとあり
 がた神曲に云へます。
 一いゝ高き聲でもはななりと
 思ふ人ゝ人なる人なれ」
 と取りますので、またとあり
 がた神曲に云へます。
 一いゝ高き聲でもはななりと
 思ふ人ゝ人なる人なれ」
 と取りますので、またとあり
 がた神曲に云へます。

今ぞ知る神の大愛

10年間の浄化終末に近づく

[illegible][illegible]

けしまたて受、打たれ思
い出しては謝罪しています。
手足の伸化はなにも起きまじ
たが、九月、八月は事なり過
こされていくことがあつた
と。十月までは、足等の局所
的な伸化がかりました。現在
では水曜日を休んでいるので
少しも、足の伸化に気がつか
ずとも、結果には現れたかと
思われる。よく聞いていただ
きました。

第一問の伸化がどう進む
れてしまふ、正午あたりで
できるよになり、今日の新
年報には記者代表まで、お
玉手奉納の題目が掲げられ
いたかくて恐ろしい、心から感
謝いたします。

とりわけわが女、膝下られ
ることは、もう十年にわたる
某年の東京、一週田舎であ
つたのでなく、一週田舎であ
つたのでなく、一週田舎であ
つたのでなく、一週田舎であ

上ける。今切で、私の今日
あるのを等々として信望の福
望があるなどと、思つて居て
ゐないです。

明主様本日はありがたうと
言いました。また会長を始め、
最後まで御座います。いかに
と御座います。心から御礼申
上げ、この愛を返してあげて
いきたいと思います。

△附記▽

六月十日は、德國郵船旅行
團の出発と目でありました。

その日、朝平五日のため、
月の例儀、家裏の、お寺の
時間に向つてのことです。す
が、誠に不都合な事柄でした。
ことを思われず。

例儀にしては、この青龍日
の未時の文化は、今、神様の
神威のお計らいによるものと考
えられ、感謝順天を言ふ。こ
こに御礼を申し上げてお上
げます。

でいる片や、安閑たしてゐるのでは、眞の情者とは申せませう。會長先生が、前でお説き下さいましたことからとて判斷して下さいますよ。世界的な大著作が、間一瞬と通つておられます。お互ひに懇話を絶つて御座る者同合はせています。この眞大膽が、御算されておいたんだくは、會費増徴と御用を盡して、いたかねばなりません。また、それ以外に達はしないであります。そして最も極端の如くに、御用

で、力を入れべき事か、愈よく考へ出して、いたして、退き退からぬよう歩まされて、いたがたいお存じます。

以上、常々會長先生からご指導いただいておられる方には、当然過ぎる御座ると思われるのであることを申し述べてまいりました。

「おこわり」 例第(第十二) 号(五回)通り、また、原本の、の横のおかげで、中、調とあるのは、その誤りです。とおけり、訂正します。

[illegible]

大變化が起る。ちやうど
正午の二時半。夏鳥をくた
めになげな。椅子に腰を
たか。急に力ツキが起つ
た。数回こみあげしまい
した。そして、いよいよは
とがから出た。こーい、伏
し、最後は寝ておぼれても
う。今ぞ知るは

のが氣なかり、余計な細
 事となればならなかつたよ
 と思はれた。

幸にもその後、廣政親衛の状
 體に立ち戻つてゐた。まじ
 大坂、この間、會長先生にぬ
 橋園方に、大變な心配を托が
 いた「シロ」だ。すうかり取

神の大愛

もいままでのように思ひ
 感ひがなくなりました。一時
 は苦悶した色も次第に去るな
 り、最近はその色まで趣味を消
 へてきました。

時に年中のどのごとく興つて

化終末に近づく

田中
 曉康

と驚かしてやうなことを、
このたまたません。

もうあつた。二十五日の誕生日
日金迎へる。朝七十五歳で
た。何れも年長は、いまだに
ない。朝の半分で、このまゝ日
を迎へてさうした。たまたま
つて、今般、周知にさう
で、地方自治建設の費用の一
割を、費ひてゐる。たまたま
のとあつてゐる。

最後に私は、如何なると
通過してゐる。何れも、大
神・明主様に、が、が、が、
ば、あつて、身を起して申し

た。

と、と、と、と、と、と、と、と、
機のため、大説、大説、大説、
た。大説、大説、大説、大説、
と、と、と、と、と、と、と、と、
一日、一日、一日、一日、
と、と、と、と、と、と、と、と、

刀が、この、この、この、
ていて、法で、法で、法で、
と、と、と、と、と、と、と、と、
行の、行の、行の、行の、
け、け、け、け、け、け、け、け、
また、また、また、また、
た、と、と、と、と、と、と、と、
た、と、と、と、と、と、と、と、

よと出てゐる「であります」。

この超絶的な文明に生まれ合
わせた私たちの幸せ。しかも、こ
の時代に生存する数十億の人類の
中で、特に出遇へて御主王・明主
王のお救ひにいち早く救済をう
けたない人類のない幸せを思う
とき、身の震えるような感動を覚
えるのであります。正に、

「空前絶後の一大壮劇」であり、
「この事象の真諦が分つた」とし
ら、その数は人類の総数にない
程絶大なものがあふ（『本教最
いの真実性』）であります。よう
然した上で、有難い有難いとい
ふべき事か、何れを「一王王」にし
て、善くおつかひいふので
あります。それ超絶に満足して
ゐるが、仕事もよくおつかひ
ですわ。今、何れが一王早くやる
べき事か、何れを「一王王」にし
て、力を入れたべき事かと、御主
王へて、それをはやめていくん
です。そうするのそれだけで小さ
い事も、よく心に解決するこ
ともあるんですよ。（教4・78、
p.14）

お互に、今のこの重大時間
に、明主王のお救ひに御救いをう
けた人間として何れが一王早く
やるべき事か、何れを「一王王」に

一 陽明人衆の叛いて、明主擁つたに、二 尊皇の旨取り違ふをさ
 御主尊皇を、聖に威り行わせ
 され、甚に困窮し七年の勤し
 い果を、賜はせられていたがこ
 とが過ぎまして、漸に二 陽明に

このとき山空二庵の結びつきを
きいたたいたものの、其の後
も小の浄化は年々続いていた
した。
昨年六月十日、思いもよらぬ
た。

いた、櫻く「これは何回
だ、直ちに軍港せば助か
んならこいつ、翼がそれ
かゝるにせよ。たゞ、それ
を断つても、やうに疾速
に飛ぶ、さういふことが

であつたかも知れません。それ
を悉くかかつて生命を遂げつた
えなう程度に、小別と浄化を
いふてきたとは、何とい
つて神機の大なる眼である
私を私はの目目を哀れ過けし
まゝなので、機動力限りなく
清まらせ、たゞその日を待つばかり
ありました。しか前目の
大化のため、廻顧にならつて

工人に外ならないものであります。そして非常に近い将来、この若々の地球上に天國が生まれようとしている、明王様の御方によつて、明王様の御教義に属して、実體・天國世界が樹立される人は、大膽を張つて、何でも斷定的に言ひかねてはすよ。それは、一寸よいでも時間をおいてうまいかなんてです。よく、大膽と小膽とを言つて、中略、やっぱり大膽ですね。大膽でいく